

題字、序文、校閲

丘 浅次郎

日刊新聞に書物の広告の出で居ることが、日本ほどに多い国は、世界中何所にも無いであろうが、其の書物の広告に、何某題字、阿某序、何某校閲と二号活字(約八ミ)で大きく現わし、著者の名前は却つて五号活字(約四ミ)で成るべく隅の方へ隠してある如きことは、他の文明国では決して見られぬ所である。之は富士の山や、芸者ムスメと同じく、我国の特産かと思われるが、斯様な他国に無いことが、独り我国にのみ行われるのは何故であるか。一体書物の広告には、著者の名前と内容の概略とが掲げてあれば沢山な訳で、尚その上に、如何なる目的で、如何なる人々のために著わしたかを明らかにしておけば、それで充分であるに、肝心な方のことは捨て置いて、内容とは殆ど何の關係も無い題字や序文を書いた人等の名前を特に目立つように列べた広告が、毎日の新聞紙上に出て来るのは何故であろうか。

書物の広告は無論本屋が本を売るために出すもの故、高い金を払うて効能の無いような広告を出す氣遣いは無い。題字や序文を書いた人々の名前を列べると、それだけ書物が餘計に売れることを經驗上よく知つて居る故、それで斯様な広告を出すのである。而して題字や序文は誰が書いても宜しいのではなく、必ず高位高官の者とか、厳めしい肩書きのある所謂大家の連中でなければ効能が無い所から考えると、我国には著者や内容の如何よりも題字や序文を書いた人等の肩書きを見て、書物を買うか買わぬかを決するよう人間が、

未だ相応に多数を占めて居ると見える。即ち有名な人の名前の付いて居る書物ならば必ず内容も良い本であると思つて買うのであろうが、之では実を知らずして名を信じ、自分を主とする所は少しもなく、ただ他人の指揮に盲従して居るのであるから、思想上には奴隷の境遇にあると評せられても辯駁の仕ようは無い。自由を考え独立に判断する者から見れば、肩書きの如きは、単に甲なる他人共が相談して、乙なる他人に附けた符号であつて、丙なる自分からは殆ど参考するほどの価値も無い。各個人の真価を見積るには、其の当人の為した事業や、示した力量に依るのが当然で、他人から如何なる符号を附けられて居るか、親から如何なる家名を受け継いで居るかは捨て置いても宜しい筈である。然るに常々自由に考え、独立に判断することを知らず、万事他人の判断に盲従する癖の附いた思想上の奴隷からは、之が無上の権威の如くに見え、肩書きの有る者は總て自分よりは遙か上に位する別階級の者の如くに思われ、斯かる貴い方々の尊名が出て居る書物ならば、悪かるべき筈は無いと信じて、謹んで有難く購読するのであろう。本屋は此の辺の消息を心得て居る故、成るべく尊い肩書きを列べようと苦心するが、肩書きには、また上の上から下の下まで様々の階級があつて、一段でも上の人は下の人と同列に置かれることを快しとせぬから、恰も芝居の観覧席を特等、一等、二等と分ける如くに、題字、序文、校閲等の席を設け、大臣や従三位には題字を頼み、局長や従五位には序文を書かせ、教授や従七位には校閲の名を借り、之を並べ示して、本書は此の通り汝等よりは遙か上位する方々と特別の縁故を有する書物であるぞとの意味で広告を出すのである。聊かたりとも、自由に考え、独立に判断し得るとの自信を有する者ならば、斯様な広告を見て、其の書物を買おうなどとの心を起す筈は無い。されば題字や序文を並べた書物の広告の出ることは、世間に思想上の奴隷の頗る多くある証拠と見なさねばならぬ。

さて何故、斯様かように思想上の奴隷が多くあるかと云うに、之は一つには維新前に長らく自由に考えることを禁ぜられ、独立に判断することを許されなかつた習慣が惰性によつて、今日もなお残つて居る為であろうが、また幼い頃から思想上の奴隷と成るように教え込まれたにも因るよであろう。例えば、花咲翁の御伽話おとぎばなしなどにも、直ただちに殿様の御賞ほめに与あずかつたとか、お咎めを蒙つたとか云うことが出て来て、殿様に賞ほめられることを何よりの名譽と思わせ、殿様に咎められることを何よりの恥辱と心得させる故、幼児は自分よりは遙か上に殿様と云う別階級の間人があつて、善よい事ならば其人が賞ほめ、悪い事ならば其人が罰する、其人が善よいと云う事ならば必ず善よい事で、其人が悪いと云う事ならば必ず悪い。自分の如き低い者は万事万端その人の判断の通りに心得て居おりさえすれば間違ひは無いと云うような奴隷的思想を三つ児の頃に養成せられ、それが後々まで働いて何事も自分で自由独立に判断することをせず、總て、他人の判断に盲従し、内容実質の如何は問わず、ただ添えてある鑑定書のみ信頼するように成る。肩書きなるものは、畢竟一種の鑑定書である故、思想上の奴隷の間では之が非常に重んぜられ、肩書きのみによつて人の価値を定める上は、肩書きの階級を嚴重に區別し、之に対する尊敬の程度をも細かく刻み分けて、御の字や様の字も、特等の人には楷書で書き、一等の人には行書で書き、二等の人には草書で書くと云う程に、形式が喧やかましく成るが、斯かく成り果てては物事を自由に考えることなどは夢にも望まれぬ。ミュンヒハウゼンの法螺物語ほらの中に、一疋の牝犬が一疋の牝兔を追い掛けて居る最中に、両方ともに急に産氣が付いて、犬も兔も七疋ずつの子を生み、兎兎は生まれるや否や直ただちに逃げ出し、兎兎は生まれるや否や直ただちに追い掛けて、都合八疋の犬で八疋の兔を追い詰め

た話があるが、習いが性となると、万事この通りで、肩書きを敬う側の者は生まれながらに肩書きを敬い、肩書きで威張る側の者は生まれながらに肩書きで威張る。従何位侯爵の何某は本屋に乞われるままに「天地玄黄（『千字文』の冒頭の一句）」とか「万里同風（『漢書』終軍伝の一句）」とか云うような何の足しにもならぬ題字を書き与えて別に怪みもせず、何学博士の何某は、本書は近来稀に見る良書とか、著者は壮年ながら感心な男とか云う提灯持ちの序文を書いて一向不思議とも思わぬ。書く当人等が不思議と思わぬ通り、書いて貰う著者も本屋も、買うて読む読者も世間も、皆之を当り前のことと考えて居る。中には跋とか称えて序文と同じ様な提灯持ちの文句を書物の終に付け、恰も箱根の坂を上る列車の前後に機関車が一台ずつ付けてある如くに、前からは序文で引き上げ、後からは跋で押し上げようとして居るものもある。苟しくも、著者に自由独立を尊ぶ心が有つたならば、自分の書いたものが、貨車同様の取扱いを受けることを無念に思い、大いに憤慨しそうなものであるに、肩書を重んずる空気の中で育つと、之を侮辱と思わぬのみか、却つて非常な名誉と心得て居る。而して買ひ手のほうは、何某序、何某跋と立派な肩書きが並んで居るのを見ると、切めては、書物を通してなりとも、貴い肩書きの人々と接触する機会を得たいとの心から、其本が欲しくて堪らず、遂に之を買うのであろう。

三

一事が万事と云う諺でも知れる通り、題字や序文によつて書物を買うような思想上の奴隷は、自由に考え独立に判断することを知らぬから、總べての方面に他人の鑑定に盲従するの外はない。例えば、嗜好の如きは、元来各自それぞれ異なるべき性質のもので、昔から「嗜好に就いては争いは無益」とさえ云うて居るが、肩書きを尊ぶ習慣の附いた人間は嗜好の方面にも奴隷の境遇を脱し得ず、絵や彫刻などを見るにも、矢張り

他人の鑑定に盲従し、他人の指図に従うて觀賞して居る。近頃の文展(文部省美術展覧会)に、切符さえ容易に買えぬほどに人の出るのは、国民の美術心が高まつた故か否かは知らぬが、審査の結果が発表せられた翌日には、二等賞を取つた絵の前にばかり人が押し寄せて、無賞のものにはかえりみ顧る人も無い。自由に考える者から見れば、絵画の如きは、各自最も自分の氣に入つたものを眺め楽しめば宜しい訳で、自分とは嗜好の違ふ他人の賞めた絵を義理に感服してやる必要は少しも無い。特に数名の委員が寄つて審査する場合には、嗜好も一人一人に違い、結局投票か何かで決するの外は無かろうから、何等賞と定まつた所で、審査員の中にも之に賛成せぬ人もあり、無論万人を悉く納得せしむべき性質のものではない。然るに二等賞と云う鑑定書が附くと、急に之に感服して、其の筆者の画いた物ならば玉石ともに価が騰貴する。相手が斯様な連中であるから、画書きの方でも審査の結果を非常に氣に掛け、当選すれば赤飯を炊いて喜び、落選すれば頸を縊らなければ悲観する。折角纏まりかけた縁談も、出品が選に洩れたと聞けば先方から取り消しを申し込み、今まで猶豫して呉れた八百屋の勘定も、落選と知つては遽に催促に来るから、誰も審査の結果を重大視するのは無理もないが、同一の絵が昨日と今日とで善くなり悪くなることの無いは明白なるに拘らず、審査の前後で斯くまで待遇の変わるのは、見る人にも画く人にも、一般に他人の鑑定に盲従する奴隷根性がある故であらう。

最も自由に振舞うても差支えの無かるべき嗜好の方面に於てさえ他人の嗜好に服従し、他人の鑑定通りに味うようでは、其他の方面のことは無論全然他人の意見に従うの外はない。病人を医者に見せるに当つても、子供を学校へ入れるに当つても、常に肩書きや、人の話によつて撰択を定め、某博士は名医である、何某侯爵も何某伯爵も其の診察を受けたとの噂を聞けば、直に其の人に見て貰う氣に成る。横町の稻荷様は御利益があるとか、隣りの村の八幡様はよく利くとか云われて、直に御詣りに出掛ける迷信家と精神の状態は少しも

違わぬ。医学博士の学位は「蛙の血液の粘着性に及ぼす『ラジウム』の影響に就いて」とか「飢餓時に於ける兎の大腿骨重量の減少に就いて」とか云うような、診断とも治療とも何の関係も無い論文を提出して取つたものも多く有るに、常々肩書きのみを尊重する癖の附いて居る思想上の奴隷は、斯かることには少しも構わず、ただ博士と云う肩書きさえあれば治療も必ず巧であろうと思ひ込み、博士の中にも博士以外の者と同様に善人もあれば悪人もあり、賢者もあれば愚物もあり、木訥な者もあれば奸佞な者もあり、上手もあれば下手もあるべき事などには、丸で考え及ばぬ。田舎の人からは時々、何方でも宜しいから博士の方に一人御紹介を願いたいとの依頼を受けることがあるが、之などは肩書き崇拜を最も露骨に現わして居る。近来肩書きのある医者が続々殖えるに拘らず、根本的研究が其の割合に進まぬのは、恐らく世間に斯様な連中が多いからであろう。

四

自由に考え独立に判断することを知らず、常に他人の鑑定に盲従する癖の附いた世の中では、学校教育なども、自然内容実質の如何は捨て置き、専ら形式や称号を重んずるようになる。教師は各々自分の仕事は何の為にするものかを考え、其の目的に最もよく適する教材を取り、最も有効と信ずる方法によつて教えさえすれば宜しい筈であるが、他人の批評に気を揉む餘り、ただ參觀人の目に着きそうな点にのみ心を配り、何か一つ目先の變つたことをして、參觀人を感服させて遣らうなどと教育本来の目的とは縁の無いことに骨を折る。良いと評判のあることは、土地の事情などに構わず、隣りに後れぬように急いで真似し、新しい仕組みと聞くと、直に之を採り用い、外形の改まったことを進歩と名づけ、内容の旧の儘なることは知らぬ顔で

済まず。先日、宇都宮附近まで散歩に行つたとき、或る町で裏に幾らでも塵の捨てられる空地の有るに拘らず、一籽キロ毎に東京のと同じようなコールター(コール)塗りの、而も石油箱位の小さな塵箱が一個ずつ必ず備えてあるのを見たが、形式を重んずる者の為すことは万事この類である。若しも模範と見做される学校へ、年々何千人も押し寄せて来る參觀人が国へ歸つて、この塵箱と同じく、ただ東京の真似をする様であつては、何程の無駄な事が行われるか知れぬ。役人に賞められた学校は賞められぬ学校よりは必ず良い学校と見做され、二度賞められた教師は一度賞められた教師よりも一層良い教師と価が定まる。總べて、他人の鑑定次第で相場が定まる以上は、賞められた本人が非常に喜ぶのも、卒業生が寄つて祝賀会を催して呉れるのも不思議は無いが、斯様なことでは、真に内容実質の進歩することは、却つて遅れることを免れぬであらう。

また肩書きを重んずる世の中では、学校へ入学する者も、求める所は内容実質ではなく、卒業と云う名である故、無理な工面(くめん)をして一段高い等級の学校へ行きたがる。教える事は同じでも、卒業生に何とか称号を与えるように成ると、急に入学志願者が殖える。女学校の如きは入学者の目的は全く嫁入りの時に単筒長持と一緒に持つて行くべき卒業証書を得るにある故、各科目に就いて云うと、教師も生徒も、何のために、其の学科を修めるのか分からず、ただ之を修めねば卒業が出来ぬ故、止むを得ず勉強して居るのである。形式を整えるために数多く並べ連ねた科目を、ただ卒業の名を得んがために片端から暗誦して居るようでは、女子教育も頗る覚束ない。南洋諸島の土人は、身体に様々の入墨をして裝飾とするが、肩書きを尊ぶ社会では、学士とか、卒業生とか云う名前は一種の裝飾であつて、土人の入墨と同じ役に立つ。即ち各種の学校は年々何百人かの学生生徒に、学士とか、卒業生とか云う文字を入墨して世に出して居ることに当るが、斯様に考えると、文部の文と、文身(ずいれ)の文とが同じ字であるのも決して偶然でない。

自由に考え、独立に判断する者から見ると、大学と云うても専門学校と云うても、同じ程度のことを教えさえすれば位も同等な訳で、若しも教授の学力、生徒の勉強が大学よりも優つて居たならば、名は専門学校であつても、無論この方が上である。然るに専門学校と云う看板を大学と云う看板に掛け換えると、学校の価値が急に高まる如くに思い、之を昇格と称え、其の事が行われそうに成つただけでも前祝をして喜ぶ人等もある。何々農学校とか何々医学校とか云う名前は、別に改める必要も無い故その儘に置いて、努めて内容実質を善くし、他の農科大学、医科大学よりも真価に於て優るものが出来たならば、肩書きに構わぬと云う点だけでも大いに尊敬するに足るよう感ずるが、何物でも人為階級の高下によつて相場を定める奴隷根性に充ちた世の中に、其の様な学校の現れるのを望むのは、素より無理な注文であらう。

五

その他、思想上の奴隷と見えるものは、有らゆる方面に無数にある。先年東北地方を旅行した際に、或る町で泊つた宿屋の廊下に、何某侯爵閣下御宿泊、何某伯爵閣下御宿泊、何某大臣閣下御宿泊、某知事閣下御宿泊などと云う大きな板札が隙間なく掛け列べてあつた。而も、其の幅が、階級によつて少しずつ違つて、何某内務部長殿御宿泊の辺に行くと、大分狭く成つて居たので、武州高尾山(東京都八王子市にある山で山頂に高尾山薬王院がある)の杉苗寄附の木札などを思い出して可笑かつた。自由に考え、独立に判断する者から見れば、悪い知事よりは善い宿屋の亭主の方が、世の中の為には餘計に役に立つ故、不法の宿料を貧らず、旅客の便利を図りさえすれば、立派な一人前の人間として、決して他の人々より遙か下に位する如くに自らを卑しむ必要は無い。特に侯爵閣下、伯爵閣下と来ては、先祖が嘗て何等かの御役に立つたことが有ると云うだけで、当人には何の取り得も無

く、裸にしたら、知恵も力も宿屋の亭主に及ばぬ者が沢山にあらう。譬えて云えば、内容の極めて貧弱な書物の巻頭に、有名な人の書いた「我子孫也」と云う題字が添えてある様なもので、題字に構わぬ人は決して之を買う気遣いは無い。然るに長い間、士農工商中の最下等の者として、奴隸の如き取扱いを受け来り、当人も之に慣れて、自分を卑しい者と信じ、肩書きのある人々は自分よりは遙か上の貴い者であると考える癖が附いて居る故、偶々たま肩書きの有る人が泊り込めば、我店の相場が一段上つた如くに感じ、嬉しくて堪らず、一人でも餘計に此事を吹聴したい故、客の通り道に尊名を並べ掲げたのである。此の亭主などは、法律上では自由の人民であるが、根性の持ちようは、印度の最下級の奴隸と少しも違つた所は無い。斯様な連中は何々會總會にでも出席して、会長何某伯爵閣下夫人の顔を見ただけでも名誉と思ひ、十メートルまで近づき得た者は、身づく機会の無かつた者は、五メートルまで近づき得た者を非常に羨み、三メートルまで近づき得た者は、身に餘る光榮として、孫の代まで自慢話にするであらう。奴隸的精神の充満して居る社会では、斯様なことは極めて普通で、限りなく例のあること故、他は略する。

六

さて今日はヨーロッパ大戦争(第一次世界大戦)の最中である。我国は幸い戦場と遠く距つて居る故、暫く楽が出来るが、此の戦争が如何に終ろうとも、其の後には、直ただちにまた旧に倍した激しい民族競争に加わらねばならぬ。政略上、甲の国と同盟するとか、乙の国の仲間になるとか云うことは絶えず有らうが、之は時々変更する故、民族間の競争に於て、真に頼りとすべきは、自己の実力より外には無い。他国の速すみやかに進歩する間に挟まつて自国だけ進歩が遅かつたならば、実力上、他の圧迫を受けて非常に苦しい地位に陥り、遂ついには敗れることを

免れぬ。而して^{しつう}實力を進歩せしめるには、先ず各個人ともに實力を尊び、實力の如何によつて人を評価する風俗を造ることが必要である。戦争後は各国ともに、間諜^(スパイ)に対する警戒も頗^{すしぶ}る嚴重になり、自然總べての外国人に対する用心も深く成つて大概の事は秘密にするであらうが、之は我国の如き、何も彼も真似で進み來つた国には大打撃で、之からは万事自力で我が文明を進めるの外に途は無い。而して^{しつう}自力で文明を進めるには、他人の鑑定に盲従せず、自由に考え、独立に判断する習慣を養うことが何よりも肝心である。特に我国は人種の關係上、他の列強に比して、競争の苦しみは一倍多かるう。先日、米国の一議員から送つてきた別刷に、世界の平和を保つには、英、米、独、仏の四国が同盟するが宜^{よろ}しい。斯^かくすれば、極東の新興國が勝手な事を為^しようとしても、武力で之を抑制することが出来るとの説が述べてあつたが、之は到底出来ぬ相談であるとしても、我国の勃興を喜ぶ國は日本以外に一國も無いのは確である。米国の如きはヨーロッパ諸人種の混合である故、英國を敵とせんとすれば、国内の英國種の人民が反対し、ドイツを敵とせんとすれば、国内のドイツ種の人民が承知せず、フランス種でもイタリア種でも、それぞれ母國を敵とすることに反対するから、拳國一致で敵とすることのできる相手は日本だけである。斯^か様な事情もある故、今後の日本は一人で三人前の實力を備える位でなければ殆^{ほとん}ど安心が出来ぬ。ドイツでは此頃は、花園を廢して、ジャガ芋を作つて居るとのことであるが、四方異人種で囲まれて居る我國は、全く今のドイツと同様に奮発し、裝飾に属することは悉^{ことごと}く他日に譲つて、専^{もつぱ}ら實力を増すことに努力せねばならぬ。而して^{しつう}、實力を増すには先ず空名を崇拜する如き奴隸根性を一掃する必要がある。

誤解を避けるために云うて置くが、如何に自由に考え独立に判断するが宜^{よろ}しいと云うても、決して他人の意見を全然無視せよと云う訳ではない。各個人の経験は狭い範圍を出でず、思考の力にも不十分な点があるを

免れぬ故、何問題を論ずるに當つても、他人の意見を参考することは素より必要である。學術上の研究を始めるに當つても、先ず当面の問題に關し、之まで他の学者が如何なる研究をしたかを広く調べる必要がある通り、他人の判断や、鑑定も成るべく多く聞いて見るが宜しい。併し、之は何所までも参考の材料であつて、結局の判断は当然自分の力で為すべき筈である。また肩書きを重んずるなど云うても、決して人間を悉く平等と見做して、其の間の差別を無視せよと云う訳では無い。人間には、生來の賢愚により、教育の多少により、実力に著しい相違の有るは目前の事実で、強いて之を平等と見做すのは素より理に合はぬことである。実力も違い、専門も異なる人間が多数に集まつて社会を造つて居る以上は、設計する者、実行する者、教える者、習う者、指図する者、従う者、乗る者、担ぐ者などそれぞれ役目の異なるべきは当然で、役目が違えば各々、肩書きを定め置くのが便利である。職務上、命令を下すべき者が命令を下し、服従すべき者が服従するのは、無論必要なことで、之が乱れては国は治まらぬ。特に自分等が選んだ世話人の云うことならば、多少自分の意見とは違つても、我慢の出来る限りは之に従うが宜しい。旧い人ばかりの所では、自治の名は有つても、自治の實の行われぬのは、上の階級の者にでなければ服従せぬと云う奴隷根性が抜けぬからである。併し、職務を離れ、自分一個として物を考える際には、何所までも独力で自由に判断し、如何に厳めしい肩書きのある者の云うた事でも、自分で成る程と思はねば、決して之に盲従するに及ばぬ。題字や序文を書いた人の肩書きを見て、書物を買うような奴隷根性が世間一般に蔓つて居る間は、国全体の内容実質が速に進歩する見込みは無い。

以上は題字、序文、校閲と肩書きを並べた書物の広告を見て胸に浮んだ考えの一端を述べたのである。

(大正四年十一月)

(『中央公論』大正五年一月)

- 『煩悶と自由』（大日本雄辯会、一九二二年二月）所収。
- 読みやすさのために、旧かな遣いは新かな遣いに変更し、適宜振り仮名をつけた。
- 理解を助けるために適宜割注を附した。
- PDF化には $\text{L}^{\text{A}}\text{T}_{\text{E}}\text{X}2_{\epsilon}$ でタイプセッティングを行い、`dvipdfmx`を使用した。

科学の古典文献の電子図書館「科学図書館」

<http://www.cam.hi-ho.ne.jp/munehiro/sciencelib.html>

「科学図書館」に新しく収録した文献の案内、その他「科学図書館」に関する意見などは、「科学図書館掲示板」

<http://6325.teacup.com/munehiroumeda/bbs>

を御覧いただくか、書き込みください。